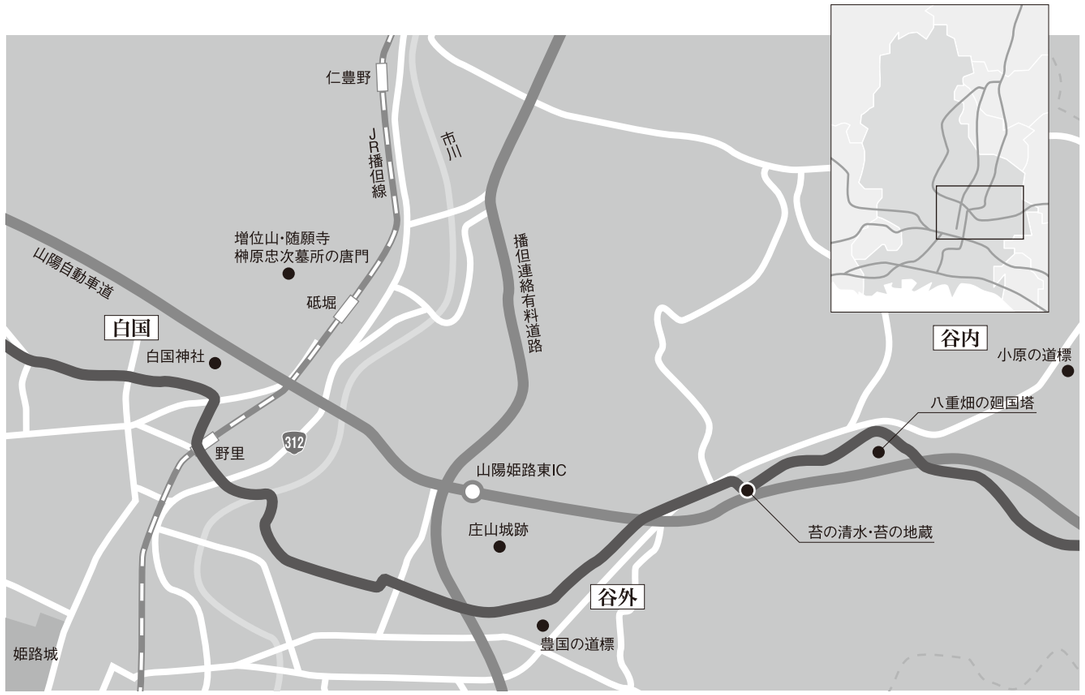
エリアで見る巡礼道①



谷 外［谷外地区］

古くからの交通の要衝

巡礼道は、豊国から石積山の麓を通り、市川松ヶ瀬を渡って保城へと続いていました。かつて赤松貞範が城を築いたといわれる庄山山麓は、巡礼道（丹波道）、但馬道、有馬道が交差する古くからの交通の要衝でした。豊国には、西国三十三所巡礼を成就した人たちが延宝5年（1677年）に建てたという姫路市内で最も古い道標が残っています。また、庄に萬屋、大黒屋などの巡礼宿があったといわれています。

巡礼道（丹波道）

庄山城跡

豊国の道標

谷 内［谷内地区］

巡礼宿があり賑わった

巡礼道のルートは、残っている道標の位置から考えると何本もあった地区があったり、不明瞭だったりするところもありますが、主なルートは一乗寺を出てから志方町野深（加古川市）、飾東町大釜を経て、山崎、豊国へと向かうものです。一乗寺から豊国までは丹波道と同じルートをたどります。

八重畑には「大乗妙典日本廻国供養塔」「嘉永元年」と刻まれた廻国塔が残されています。また、合羽屋、紅屋という巡礼宿があったともいわれています。

小原には２基の道標があり「右ほっけ　左たんば」と刻まれており、ここに交差する小道が巡礼道の間道だったことを示しています。

巡礼道（丹波道）

八重畑の廻国塔

小原の道標

苔の清水・苔の地蔵：山崎に湧く清水は苔の清水と呼ばれ、播磨十水の一つといわれました。お堂には３体の石仏があります。

白 国［増位地区］

在原業平の歌に詠まれた

白国の巡礼道の北側には増位山随願寺があります。寺伝『増位寺集記』によると、聖徳太子の命により、高麗の僧・慧便（えべん）が開基し、天平年間に行基が中興したもので、中世末期には山上に36坊が立ち並んでいました。天正元年（1573年）、別所長治によって全山焼失しましたが、天正13年（1585年）に羽柴（豊臣）秀吉が再興しました。承応3年（1654年）に建立された開山堂は、随願寺に現存する最古の建造物です。姫路城主・榊原忠次（さかきばらただつぐ）墓所には、享保16年（1731年）に建立された唐門をはじめ、本堂、開山堂、経堂、鐘楼があり、国の重要文化財に指定されています。

増位山には在原業平や西行などが訪れ、歌を詠んだと伝えられています。貞観17年（875年）、随願寺に勅旨として訪れていた業平が詠んだ「播磨路や糸の細道わけゆけば砥堀に見ゆる有明の月」という歌に出てくる「糸の細道」は、砥堀から有明の山までの道を指していると考えられています。

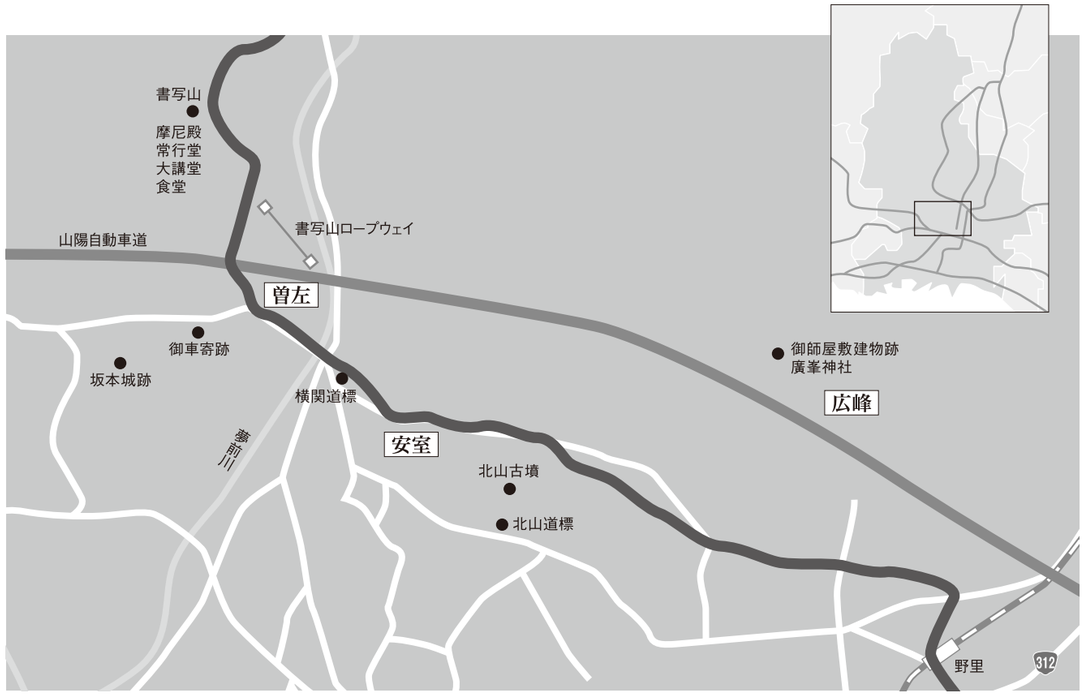
播磨四の宮の白国神社は、阿曇武命（あそたけるのみこと）の妻がお産で苦しんだとき、神吾田津日売命（かんあだつひめのみこと）を祭り祈願したところ安産であったため社殿を設けたといわれ、安産の神様として有名です。

増位山・随願寺

榊原忠次墓所の唐門

白国神社

エリアで見る巡礼道②



安 室［安室地区］

巡礼者への道しるべが多く残る

安室は夢前川の氾濫でできた沖積平野で、1400～1500年前のものだと考えられる北山古墳など、数多くの古墳が見られる地域です。『播磨国風土記』には渡来人系の人たちによって開発されたという記述が見られます。中世は書写山円教寺とのつながりの中で発展してきました。地区内には書写山への巡礼者のために建てられた道標が多く、観音坐像が掘られた横関の道標を見ると、観音の左手が指し示す方向には「ほつけさん・ひろみね山」と、右手の指し示す方向には「しよしゃ道」とあります。北山には2つの道標があり、それぞれの面には「書写山、鹿谷道、ひろみね、ほっけ山、たつの、むろつ」などの地名が刻まれています。いずれも安政年間（1854年～1860年）ものです。

北山古墳

横関の道標

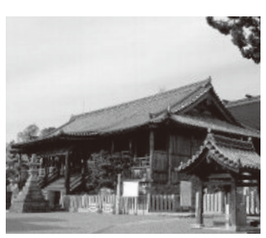
広 峰［広峰地区］

牛頭天王の総本宮

廣峯神社の創建は崇神天皇（すじんてんのう）のころと伝えられ、奈良時代末期に吉備真備（きびのまきび）が唐から帰国した際、神託によって社殿を造営したといわれています。後白河法皇『梁塵秘抄』に「関より西なる軍神、一品中山（いっぴんちゅうざん）（岡山県・中山神社）、安芸なる厳島（広島県・厳島神社）、備中なる吉備津宮（岡山県・吉備津神社）、播磨に広嶺…」とあり、古くから多くの信仰を集めていました。本殿と拝殿は国指定の重要無形文化財です。軍師として羽柴（豊臣）秀吉を天下人に導いた黒田官兵衛の祖父・重隆は、廣峯神社の御師（おし）が配るお札とともに黒田家の秘伝の目薬を売って、財を成したといわれています。

貞観11年（869年）、畿内外で疫病が大流行した際、清和天皇の夢枕に「廣峯神社の御分霊を京都にお迎えして、祈祷せよ」というお告げがあり、廣峯神社の神を京都の祇園社（現在の八坂神社）に分霊してお祭りすると疫病は治まったといわれています。

廣峯神社（表門）


廣峯神社（拝殿）

御師屋敷建物跡

曽 左［曽左地区］

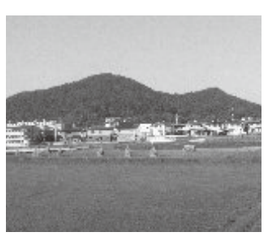
円教寺の門前として発展

「曽左」の名は、素戔嗚尊（すさのおのみこと）の古事による書写山の旧名である「素戔（すさ）」に由来するといわれます。書写山円教寺の門前として発展した地域です。円教寺は最盛期には山上に170ほどの院や坊があり、天台宗三大道場の一つでもありました。境内は国の史跡に指定され、重要文化財の常行堂、大講堂、食堂など見応えのある建物が立ち並んでいます。

付近には、応永29年（1422年）、赤松満祐が築城し、嘉吉の乱の際に陣をとった坂本城跡があります。また、花山法皇や後醍醐天皇が書写山行幸の際、車を停めた屋敷「御車寄跡」があります。

書写山円教寺（摩尼殿）

書写山円教寺（常行堂、大講堂、食堂）


坂本城跡